

7月



令和6年7月1日  
佛教大学附属こども園

「仏教保育7月のねらい」

布施奉仕

「ありがとう」

園長 佐藤和順

早いもので、1学期最後の月となりました。4月に入園・進級し3ヶ月が過ぎ、園での活動も活発になり、一人ひとりの身体と心の成長を日々実感しています。

さて今月の保育目標は「布施奉仕(ふせほうし)誰にでも親切にしよう」です。他人に親切にすることはまわりまわって自分にもどってきます。そうした利害をぬきにしてどのようなときも隠れた親切が、社会を明るくすることをしらせていきたいと考えています。

布施とは、「施し」です。「施し」とは、手を差し伸べるということ。相手の立場に立って、何かをすることです。「施し」は、決して見返りを求めるものではありません。ボランティア活動などがその代表例かもしれません。「布施」と「奉仕」の目指すものは同じです。「布施」にはいろいろな方法があり、お金が無くても、地位が無くても、いつでも、どこでも、誰に対してでもできることです。しかし、簡単なようで難しいことでもあります。「布施」という言葉は「喜んでもらうこと」と言い換えたら分かりやすくなるのかもしれませんが。今でも能登半島地震復旧のボランティアの様子をメディア等で目にしますが、頭の下がる思いです。

子どもの「喜んでもらうこと」を志した行動については、私たち大人は、それをしっかりと受け止め、時には言葉や行動で褒めることによって次につなげていかなければなりません。園では年長の子供も、年少の子供もが困っているのを助けてあげるという場面はよく目にします。たとえばそのような時に「ありがとう」という言葉で応えるということです。子どもの良い行いを見たら先生が率先して「ありがとう」と声をかけます。「ありがとう」と言われた子どもは、とてもうれしそうに満面の笑みを浮かべています。ほめられたという嬉しい気持ちが自己肯定感を高め、また次の良い行動につながっていくのです。人に何かしてもらうことは当然のことではなく、感謝の気持ちを持つことはとても大切だということも学んでいることでしょう。子どもに負けないように先生同士も困っていることがあれば助け、助けられたら声に出して「ありがとう」の気持ちを表していくことを心がけています。まずは、子どもに一番身近な私達が「布施奉仕」の行動を実践していきたいと思えます。そして、小さなやさしさが連鎖し、「ありがとう」の言葉がたくさんあふれるような社会になることを切に願います。

